

竹田聖彩

名古屋大学・5年

アメリカの Johns Hopkins 大学、Duke 大学、North Carolina 大学、北京大学の医学生が合計 11 名、名古屋大学サマーキャンププログラムへ参加するために来日し、1 週間のプログラムを経験しました。

5 年生は私を含む 4 人が参加し、プログラムの始めに日本の保険制度や包括ケア医療についてプレゼンテーションを行いました。プレゼンの終わりには、特にアメリカの学生が熱心に「私立病院と公的病院のサービスが同じ値段で提供されるのは本当か」「医療保険は全員に適用されるのか?」「患者自身が行く病院、診療科を選んで直接行くことができるのか」など質問をしてくれました。いきいきとした質疑応答でした。

その後 1 日目は病院、オペ室、研究室をすべてツアーとして見学しました。

病院内はもちろん、ヘリポートにも上がり、貴重な経験でした。初の名古屋大学医学部史料館にも訪問し、名古屋大学病院の歴史を学びました。名古屋大学の学生として、自身のルーツを再確認できる時間となりました。アメリカの学生に日本や名古屋大学について説明できたことも、自信となりました。

2 日目は小児科の先生方から NICU に関するお話を聞き、ロールプレイなども行いました。大変学び多い時間でした。はじめの講義から参加型で既にとっても楽しく、倫理についてペアで考えるなど、自分の理解を再確認できる機会になりました。

チーム内でのロールプレイでは、全員が医師、看護師、患者などの役割を演じる実体験を通じて段々と理解が深まりました。「もし次があったらこうしてみようか」など、あの短時間にも関わらず、凄く自分の中で学びが進んだ実感がありました。

アメリカ中国の学生含め、私たちも NICU の詳細について詳しくはありませんでしたが、用意してくださったスライドに、経過や考えうる後遺症の起こる割合表などの深い内容も説明を用意してくださったおかげですごくわかりやすく、ロールプレイにより身が入りました。海外からの医学生達も、「こんな授業の形があるんだ」と驚いて、とても楽しんでいるのが伝わってきました。

後半の漢方やお灸の授業では中国の方が説明してくれました。葛根湯や黄連解毒湯など漢方を各班で煮出しました。私の班は黄連解毒湯だったのですが、濃い黄色で、なんとも言えない苦さのある漢方です。初めて飲んだ班員全員で驚愕しました。

いくつかの材料の中から、「この Oren が入っているから苦いのだよ」と中国の学生がごく自然に教えてくれ、中国の医学生にとっては日常的に使用する馴染み深いものなのだと感じ

られ、素直に驚きました。

その後は名古屋大学の xR センターにも伺い、ダヴィンチの練習用機械や、胆嚢除去術のシミュレーター、VR でのペットセラピー体験など行うことができました。

いつも先生方が内視鏡手術の練習をされたり、技術向上のために真摯に手技と練習に向き合っていていらっしゃるお姿をポリクリ内でも見る事が多くある場です。先生方の実力と安心感は、このような見えない努力に支えられた結晶なのだと、信頼できる医師像を形作ってくださっている名古屋大学の先生方に感謝する気持ちを改めて感じました。

「名古屋大学にはこんな設備があるのね!」「私たちの大学ではこの体験はできなかった、凄いな」とアメリカの医学生等がとても驚いて、夢中になってくれる姿を見て、私も勝手に嬉しかったです。

3 日目と 4 日目には訪問診療を熱心に行われている「かがやきクリニック」さんへ一泊二日の日程でお伺いさせていただきました。

小児福祉の医院も経営されており、大変学び多い体験を数多くさせていただきました。海外医学生の子たちは、実際に訪問診療の自宅への回診に付き添い、経験させていただくという本当に温かな、得難い経験をすることとなったと思います。私は主に小児医療の施設を見学させていただきました。

日々の生活に生涯にわたる医療補助が必要で、成長の過程で難しいことが増えていく小児の子達は多くいますが、かがやきクリニックさんには、一人ひとりに寄り添って一緒に人生の一部をつくるような、子供たちとの時間がありました。

0~6 歳の福祉的支援の必要な子供たちが通うのですが、それぞれ 1 人に対してスタッフの方が真剣に向き合い、その日はホワイトボードいっぱいはその子の「すき」が書いてありました。病状について、必要な器具や使用頻度等についてはもちろん、大きくなったら食べたいもの、何をするのが好きか、サポーターのできること、すべきことは?とひとつずつ取り上げられています。家と家族との関わりのみに留まらざるを得ない状況が多い子供たちへ、家族と外に泊まる、お出かけをする、家以外の場所で過ごすなど、社会と触れる幅を段階的に広げる活動を間近に見られて、なんと温かいのだろうと感動しました。

ただの医療や福祉の提供として、「食べさせる」「お風呂に入れる」などの与えるケアにとどまらず、「できた」を増やす、「やれる」を取らない方針に素直に心動かされました。与えられることだけがケアではないと教えていただく中で、感覚を大切に、芝生を踏み、土を触る体験を経て初めは嫌がっていた子供達が走り回る成長を知りました。

あまりに自然なことで忘れがちである、経験をつむ機会がどれだけ大切で、日常の喜びになるのか、改めて気付かされました。

かがやきクリニックさんでの最後の活動として、グループに分かれ、地域医療の pros cons について考えて発表しました。各国の違いもふまえて約 15 分でアイデアを出し合い、紙を作りその場で発表するプレゼンは面白かったです。海外医学生の、自分の中での咀嚼のみならず、アウトプットの実力を間近に感じ、とても勉強になりました。

岐阜では浴衣体験や鶺鴒、フェアウェルディナーなどアクティビティも多数あり、こんなに支えていただいているものかと信じられないほど良くしていただきました。本当に楽しく最高の思い出です。

最終日には、医療ケアシステムについて、各国の構造、自国以外の 2 カ国から学んだことをそれぞれまとめ発表しました。共同作業でスライドを作り、行ったプレゼンテーションは楽しく、学び多く、このプログラムの締めくくりにぴったりに感じました。プロモーション動画を作ったチームの動画は本当に心温まり、この 1 週間がどれほど濃く素晴らしい体験だったのか改めて感じました。

最後のお別れの時は名残惜しく、全員でハグをして何度もバイバイと言いながらお別れしました。このプログラムを通じて、お互いへのリスペクトと信頼が生まれ、生涯続く友情を育めたと思います。